〔書　評〕

日野原重明、仁木久恵訳『平静の心――オスラー博士講演集』

聖路加看護大学学長日野原重明氏はわが国の代表的な内科医として知られ、医学教育や医療制度について活発に発言し、健康教育の面でも新分野を開いておられる。その氏のバックボーンを形成しているものにオスラーがあり、その最初の出会いは終戦直後、わが国に進駐してきた一軍医がもっていた彼の著『平静の心 Aequanimitas』であった。その出会いから三十八年後、十年の歳月をかけ、仁木久恵氏（聖路加看護大学教授）の協力を得て、同書を翻訳・上梓され、同時に日本オスラー協会を発足（昭和五十八年九月）せしめられた。

日野原氏は本書の「訳者序」で〈私が臨床医として生き、医学を研究し、医学を教える立場に立って働く上で、強烈なインスピレーションと、今日の仕事に全力投球できる力を与えてくれたのは、この本に示されたオスラーの言葉である〉と述べている。また同じ序の中で本書について以下のように紹介している。〈一九〇四年、当時ジョンズ・ホプキンズ大学医学部の内科教授であったウィリアム・オスラー博士は、それまでに医学生、看護婦、実地医家に対して行った十八回の講演をまとめて Aequanimitas と題する講演集を出版した。（略）この講演集は医療の世界に働く専門医の生き方を示す、いわば聖書のような福音を当時の医療職や学生に与え、一般人までがこれを愛読したのである〉

本書の題『平静の心』はオスラーが一八八九年にペンシルベニア大学を辞任するさいに行った告別講演の題であって、本書にはこれを巻初に計十八の講演が翻訳されている。それは前掲の一九〇四年までの十八篇中から十五篇を、そして同年以後のもの三篇を選んでの十八篇である。オスラーは〈晩年に向かうにつれて文章は磨かれ、論旨も整然とし、思想の深さが読む者の心に迫ってくる〉が、初期のそれは古典文学的修飾語が多く、文章は難解であるとされる。引用の言葉の調査のため仁木教授はオックスフォードにまでもかけ、日野原氏も同行したほか、カナダも訪れるなど及ぶかぎりの努力をされた。訳文は高い格調を保ちながら、しかも流暢な文体で、豊富な訳者注を入れ、さらに各講演の頭にそれの行われた背景の解説を置き、本文には新たに見出しをつけて読みやすい形にしておられる。オスラーは歴史、とくに医学史にも通じており、また敬虔なクリスチャンであった。トマス・ブラウンを尊敬し、彼について述べた一章があるのをはじめ『プラトンが描いた医術と医師』の章もある。看護婦や看護教育にも強い関心を寄せ『医師と看護婦』や『看護婦と患者』の章があるかと思えば、自らの体験もふまえての『定年の時期』などの具体的な提言もある。

〈彼ほど学生を愛し、教育を重視し、また患者を愛し、患者の中に医師が学ぶことがあることを強く説いた医学者は少ない〉とされるオスラー William Osler（一八四九―一九一九）はカナダ生、マギル大学医学部卒業、母校の講師を経て、ペンシルベニア

大学医学部の内科教授（ついでながらわが国の佐伯理一郎はここでオスラーから教えを受けた）となり、ジョンズ・ホプキンズ大学医学部創設に関与し、ひろく用いられた内科学の教科書を刊行。

さらに英国のオックスフォード大学の欽定教授に招聘され医学と人文科学の架け橋となる役を果した。彼の名のついた病名があり、ハーベイ・クッシングによる有名な伝記がある。しかしわが国では戦前ドイツ医学が主流を占めていたこともあり、オスラーは一部の人に知られているに過ぎなかったが、戦後日野原氏の精力的な活動により、その名が広く行き亘り、前述のようにわが国にもオスラー協会がもたれるまでに至った。本書には巻末に日野原氏による「ウィリアム・オスラー卿の生涯とその業績ならびに思想について」が置かれていて、その中では彼が著わした論文は一、二五三に及び、うち医学史関係が一五九あるが、その中の九九は晩年のオックスフォード時代に書かれたことなども表示されており、今後の研究者へのよき指標となるであろう。医の倫理が改めて論じられる昨今であるが、これから医や看護の道へ進もうとする学生から、すでに医師・看護婦として第一線にある人もそのあり方についてゆっくり思索する書として本書の価値は深く大きい。

（A5判　五二五頁　医学書院　三千八百円　昭和五十八年九月発行）

（長門谷洋治）

〔書　評〕

"Dutch Medical Biography; A Biographical Dictionary of Dutch Physicians and Surgeons" 1475—1975

英語で書かれた、大部（B5判一一〇〇頁余）のオランダ医学者人名辞典が、このほど（一九八四）アムステルダムで出版された。著者の G.A. Lindeboom は、長年アムステルダム自由大学の医史学教授をつとめた人物で、現在は退官し、オランダ医史学界の重鎮の一人である。すでに、オランダ医史学関係の文献総目録 A Classified Bibliography of the History of Dutch Medicine 1900—1974, the Hague 1975. という五千余の論文目録を出版し、私共のニードに応じている学者である。

今回出版されたこの辞典には、約三千名の一四七五年から現在に至る、オランダで活躍した医師について、簡潔に記載されている。これらの医師は、オランダ人を主体に、ドイツ人、デンマーク人、フランス人、スエーデン人等も含まれ、驚いたことに、日本人も一人、伝説上の人物鳩野宗巴も含まれている。記事は、名前、次いで出生地、生年月日、死亡地、没年月日、専門領域と続き、読み易いオランダ人の書いた英語で履歴が書かれ、主要著作・論文の紹介（これだけはオランダ語）に根拠論文も添えられており、今まで日本で得られにくかったオランダ医達の情報が比較的たやすく、この辞典より入手出来る。日蘭医学交流史を調査している研究者にとって、必須の文献といえる。

ただこれほど大部の著作を一人で編集したためであろう、細か

い固有名詞のミスプリントが目につくことだけが残念である。

出版社は、アムステルダムの Rodopi B.V. である。値段は二九五ギルダー（約二万二千円）。販売店であるアムステルダムの B.M. Israel (N·Z. Voorburgwal 264, 1012 RS Amsterdam, The Netherlands.) へ英語で注文書を出し、書留船便だと、上記定価に約一〇%を加えたイスラエルの連絡してくる額の送金小切手を、後から銀行で作り（手数料二千五百円）、書留で郵便局から送ると、約二カ月で現物が入手出来る。丸善等の書店へ注文するより、安く、早く買う方法である。

（石田純郎）

〔書　評〕

桑原千代子著『わがマンロー伝――ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』一九八三年、新宿書房、東京、一七〇〇円

本会会員桑原千代子さんが、長い年月に亘る調査の末に完成された「わがマンロー伝」が出版されて、今まで謎の人といわれたニール・ゴルドン・マンローの生涯と業績がはじめて明らかにされた。

マンローは一八九一年（明治二四）に来日した英人医師であるが、学生時代から考古学、人類学に興味をもっていたので、横浜で医療に従事する傍ら、広くわが国各地の貝塚の発掘を行い、日本考古学界の先駆者の一人として活躍した。

のち軽井沢のサナトリウムの院長に転ずるが、既に明治年間からアイヌ民族とその文化に深い関心を持って、度々北海道を訪れており、ついに一九三二年（昭和七）以後北海道日高、沙流川上流の平取村二風谷アイヌコタンに永住することとなり、アイヌの研究一途に没入するとともに、コタンの人たちに献身的な医療活動を続けた。この頃から日本は急激に戦時色が濃くなり、マンローは既に明治時代に日本に帰化しておったのであるが、外国人としてスパイの疑いさえかけられ、その上昭和十六年には不治の病に侵されながら、わが国の辺境の地でじっと耐え続けなければならなかった。そして翌十七年四月、七十九歳のマンローは、コタンの人たちの祈りも空しく、その数奇な一生を二風谷で終えた。

丁度マンローがアイヌコタンに居を移した頃、私もアイヌの人類学の研究に従来していたが、私はアイヌ墳墓遺跡から発掘された骨格の研究に専念していたので、二風谷でアイヌの医療に献身している外人医師のいることは知っていたが、ついにマンローに直接お会いする機会はなかったし、ましてマンローの考古学の論文を読んだこともなかった。

正直なところ一九六三年（昭和三七）になってやっとマンローの遺稿集「アイヌ―信条と文化」がロンドンで出版され、編集者であるセリーグマン教授未亡人の序文を読んで、マンローの経歴とその研究業績、そしてこの遺稿集がロンドンで出版されるに至った経緯を知ることができたのである。

著者の桑原さんがこの伝記を書くことになった端緒は、昭和二六年マンロー亡きあと軽井沢で病院の婦長をしておられたチヨ・マンロー未亡人と著者との最初の出会いにあった。このことはこの伝記を理解する上で極めて重要なことで、著者は特にこの二人の出会いを第一章マンロー夫人との邂逅と題して冒頭に述べてい

る。このとき著者は患者としてマンロー婦長の手厚い看護を受けただけでなく、さらに色々とマンローについての話を聞き、私の代りにマンローのことを書いてほしいと頼まれ、執筆を決意し、約束する。

チョ未亡人は昭和四九年八九歳の高齢で世を去り、著者は未亡人の生前に約束を果すことができなかったが、敬慕するチョ未亡人に代ってこのマンロー伝を書き上げたという想いが、「わがマンロー伝」という題名に表現されていると理解すべきであろう。

マンローの研究についての評価はまだ確定したとはいえないし、彼の人物像は今度の伝記でも充分に明らかにされているとはいえないが、はじめて謎の研究者といわれているマンローの全貌を紹介した好著として、同学の士の一読を望んで止まない。

（渡辺左武郎）

〔書　評〕

飯沼慾斎生誕二百年記念誌編集委員会編『飯沼慾斎』、飯沼慾斎生誕二百年事業会発行

幕末の蘭方医・植物学者飯沼慾斎の生誕二百年を記念して、岐阜の慾斎研究会が中心となって全国規模の「飯沼慾斎生誕二百年記念事業会」が結成され、その記念事業の一つとして本書が刊行された。慾斎の活躍は多方面に及ぶが、本書はそれぞれの分野の研究成果を総合的に取纒めたもので、大版五百頁余に及ぶ大著となっている。

この書は、慾斎研究会の中心会員である遠藤正治、北村二郎、水野瑞夫三氏の共著「飯沼慾斎の生涯」と題する総説と、慾斎研究者三十二氏の論文を集めた記念論文編、資料編の三部からなっている。

「飯沼慾斎の生涯」と題する総説は、先の三氏の研究成果をもとに、これまでの慾斎研究の成果を八十頁に及び集大成してある。著者らも序文に記しているように、今回を機に新しく発見された資料も随所に紹介されており、既知の知見と十分に突合せ検討されている。構成は、Ⅰ幼少年時代、Ⅱ修業時代、Ⅲ俵町開業時代、Ⅳ平林荘隠棲時代、Ⅴ晩年となっている。「草木図説」の執筆がなされた平林荘隠棲時代が全体の約四割を占めているが、慾斎の成長の過程や環境など、人間慾斎を窺う資料を貪慾に精査し、幕末の逸材慾斎を全人的に理解しようとする姿勢が貫かれている。なお、未だ資料が発見されずに未解明となっている部分も随所に指摘されており、慾斎の研究者にとって、先ず読んで置くべき総説となっている。

記念論文編は、Ⅰ飯沼慾斎と植物学、Ⅱ飯沼慾斎と蘭学医学、Ⅲ飯沼慾斎と本草、Ⅳ飯沼慾斎と化学、Ⅴ飯沼慾斎と人、の五区分に分けられている。慾斎の学術的業績を考えれば当然であるが、論文の数も頁数も「Ⅰ」が約半数を占めている。矢部一郎氏による「草木図説」の漢文の序文を読下し文に直し、後学の利用に便ならしめた一篇や、福原、邑田、水野、三氏による「草木図説」稿本、この稿本より前に記されたとされる「本草図集」など、原資料をもとに纒められた重要な資料的価値のある論文が多い。また、木村陽二郎氏の総説は、植物学の近代化を実践した慾

斎について、その時代的背景や人的交流をもとに、筆者一流の解りやすい文章で浮き彫りにしている。青木一郎氏は、岐阜県における最初の屍体解剖が慾斎により行なわれたこと、種痘も慾斎の手により行なわれたのではないか等、蘭方医としての重要な事項について明らかにしている。また、遠藤正治氏による「草木図説」執筆過程についての一篇も、慾斎の活用した洋書の入手経路を細かく分析しており、慾斎研究を深める上で貴重な論文となっている。

資料編では、国立科学博物館に所蔵されている慾斎の腊葉標本の目録を、台紙の記載事項を含めて記すと共に現在の学名や和名、標本番号を付し「草木図説」の実証的研究に貴重な資料を提供している。

慾斎の主著「草木図説」は、明治期に入って（明治八年）田中芳男と小野職愨により「新訂草木図説」として、続いて明治四十年には牧野富太郎により「増訂草木図説」として刊行された。わが国の自然科学が急速に近代化していく中で、慾斎の業績はなお光を放ち続けていた。近代化の光が差し始めた江戸末期に、将来の方向を見据え、自らの手で切り開いた慾斎の業績を評価し直すためにも、生誕二百年という時期を得て本書が刊行されたことは、大変意義深いことである。

（佐藤達策）

〔書　評〕

新村拓著『日本医療社会史の研究――古代中世の民衆生活と医療』

凄い本が出た。一読して最初に受けた印象がこれである。それは、再読したあともかわらなかった。

まず、本書を紹介しよう。構成は、つぎのようである。

第一章　悲田院と施薬院
第二章　中世社会における医師の地位
第三章　中世の民間医とその系譜
第四章　医師の開業と診療
第五章　薬種の流通と薬屋
第六章　古代医療の社会史
第七章　正暦五年の疫癘と流言現象
　付論一　疫病流行の季節
　付論二　飢疫の様相
第八章　藤原実資の病気とその対応行動
　付論　出産をめぐって
第九章　説話・物語世界の医療
第十章　古代中世の医薬書とその流布
第十一章　祈禱の世界
第十二章　中世医療の社会史

本書は、昭和四七年以降、著者の大学院生・研究生時代に発表された論文を中核とし、これに第四章と第五章を新たに書きおろ

したものである。

各章ごとに独立した論文ではあるが、前著『古代医療官人制の研究——典薬寮の構造』（法政大学出版局、五八年刊）に続くものであり、両著を合わせて、日本古代中世医療通史として見ることもできる。

紙数が少いので、個々に立ち入って論評することができないので、本書の特徴——それは、そのまま本書の長所であるが——を列挙すると、つぎのようになろう。

第一は、著者も前著で指摘されているように、日本医療史の研究が近世以降に偏重して、古代中世を対象とするものが少ない現在、ことさら、古代中世を照射して、その解明に成功したということである。その点、今後、日本の古代中世の医療史を志すものは、本書を通らずに進むことはできないであろう。

第二は、各章ごとに取り上げられたテーマが、いずれも古代中世医療史上のもっとも重要な問題点であり、これに古記録・文学作品などのみならず、従来あまり用いられなかった古文書類までも操作して、多角的に迫ったことである。

第三には、史料を博捜して、微細な点にいたるまで克明に調べ上げてあることである。博引旁証の精緻なことは、各節ごとに付された補注にまで及んでいる。

そして、本書の価値をもっとも高からしめているものは、副題にも掲げられているように、つねに民衆の立場に視点が置かれていることである。これは、現存する史料の多くが為政者側のものであるとき、本書の価値をさらに高めることになる。

一言でいえば、先学の業績をはるかに抜きん出た名著であるということができよう。強いていえば、用語がやや難解なものがあり、散見される体言止めがやや目障りになるくらいであるが、いずれも充実した内容に抵触するほどのものではない。

なお、末尾に主要事項索引と人名索引があるのも有難い配慮である。

（法政大学出版局　一九八五年二月刊。A5判　四〇七頁　五八〇〇円）

（日本医科大学助教授　奥富敬之）

正誤表

第二十九巻二号

桑原千代子「横浜山手病院」

ページ	行	誤	正
二二四	上段・三	米・人	英人